

優秀賞（釧路人権擁護委員連合会長賞）

笑顔の日々を増やすために

帯広市立緑園中学校 三年 和田 花梨

「十人の加害者の未来と、一人の被害者の未来、どちらが大切ですか。」（※）

2021年2月、旭川女子中学生いじめ凍死事件が起こった。この言葉は、被害者の中学校の教頭が被害者の母親に対して発言したものである。私はこの言葉を聞き、どちらか一つではなく、両者の未来が大切であると考えた。

この事件の被害者は、ラインメッセージで「裸の動画を送って」「写真でもいいよ」などの脅迫を受けた。その後、呼び出され、性的な行為を強要するなどの被害を受けた。これらの苦しみにより自殺行為を起こし引越すが、PTSDを発症してしまうようになった。被害者にとってこの出来事は、推し量ることのできない深い心の傷を負ってしまったのだ。また、事件後に被害者の母親が「学校に通うことは、怖くてできないと思う。」と発言した。これに対して教頭は「僕なら怖くないですよ。男性なので、その気持ちはわかりません。」（※）と発言した。自分がもし、脅迫を受けたらどう思うだろう。多くの人が恐怖心を抱くだろう。感情を持つことに性別など関係ない。男性だから、女性だからわかる、わからないではなく、気持ちを理解しようとし、相手に寄り添うことはできるはずだ。

私は過去にいじめを受けた。周りの大人に信じてもらえず、とても悲しかった。転校をするも苦しかった。ある日突然、親しかった友人たちからの見る目が変わった。陰で、時には目の前で、毎日悪口を言われるようになった。「学校に来なきゃいいのに」「いい子ぶってる」更にひどい言葉を言われたことがある。何をしても馬鹿にされ、いじめの標的にされた。学校に相談したが、信じてもらうことができなかった。そのため、我慢する日々が続き、一生消えることのない傷を負った。転校後も人の目を気にするようになったり、自分の意見をうまく言えなかったりしたことで、本当の自分を見失った。体調を崩すことが増え、学校に行くことが難しい日もあり、心から笑えることが少なかったのである。そして今、心から笑える日々を増やすために、考え方を変えている途中だ。少しずつ笑える日々が増えている。1年以上という長い期間を経て、人生のどん底と

も言えることから立ち直った。

旭川の事件では残念ながら被害者が亡くなってしまった。私はいじめを受けた時、笑う日よりも涙を流す日が多かった。被害者もそうだったのではないかと思う。自分を責め、思い悩み、死を選択するほどに追いつめられていたのだろう。脅迫を受けた時、どんなに怖かったか。SOSに気づいてもらえずどれほどつらかったか。PTSDを発症し、どれくらい苦しかったか。亡くなる直前、とても怖かったのではないか。被害者の気持ちがなかったことにならないように、いじめにより苦しむ人が少なくなるように、いじめを減らしていかなければならない。そのために私たちができることは、いじめをしない、いじめを見逃さないことである。いじめが発生しないことが理想だが、現実には、そうではない。それでも、必ずSOSを見逃さずに、被害者を守ってあげる必要がある。そして、被害者に対し、心のケアを第一とし、安心させること、加害者に対し、なぜその行為がいけないのかを理解させ、二度といじめが起こらないように厳しく伝え、学級や学校全体で考え、取り組むことが大切だ。

「十人の加害者の未来と、一人の被害者の未来、どちらが大切」か。私はどちらか一方ではなく、両者の未来が大切だと考える。どちらか一方の未来が大切だと考える人もいる。しかし、十人のために一人の未来が、一人のために十人の未来がなくなることはあってはいけない。両者の未来を大切にし、守るためには、法律を厳しく適用し加害者本人の矯正を第一にするとともに、誰もが加害者、被害者になるかもしれない可能性を考え、小中学校それぞれのいじめ対策プログラムを地道に教師と子どもが協力してつくりあげることだ。

私は将来養護教諭になり、誰もが気軽に足を運び、安心して相談しやすい保健室をつくり、いじめを減らし、安全で笑顔のある学校環境をつくりたい。今は転校して5か月になるが、学年の人とコミュニケーションをとることを大切にしている。同級生の少しの変化に気づき、困っている人を助けていきたいと考え、たくさんの人と積極的にコミュニケーションをとっている。これからの毎日を自分を大切にするように、他人を尊重し、世の中が明るい未来へと変わっていくように私は、今できることに全力且つ優しい笑顔で身の回りの世界を変えていきたい。

(※) 作品中の教頭の言葉については、各種報道等に基づく内容です。